

干刈狸の呟き

～ メからウロコのインフルエンザ ～

アナログ狸

常識から考えれば、おかしい！とすぐわかるものでも、常識を知らねば、そんなものかい？と簡単に騙される。そんなことは常識だ！とは、子狸の教育にも使ってはならぬ！という、訳の分からぬ教育理論のせいで、巷にも、狸界にも、ヒジョーシキが増殖中である。常識も教育してやらねばならない！のだそうだから、アナログ狸も時にはインターネットを使って、世界的常識を紐解いてみることにする。

世界的常識らしき知識といえば、インターネットではWikipediaと言う奴が標準的なものらしいので、influenzaと検索してみると、英語版のWikipediaが出てくる。幕末に解体新書を訳した先人たちの苦勞を思えば、世界的常識を知るには、せめて英語を読むくらいの苦勞はするべきだ。

英語版Wikipediaを読むとインフルエンザに感染したヒトの33%はまったく症状がない！と断言している。日本で、隠れインフルエンザなどと主張している狸どもは、インフルエンザに感染したものは症状が出ないものはない！などと言っているが、まるで違う。この根拠はなんじゃいな？とみれば、ボランティアにインフルエンザを感染させて（インフルエンザウイルスを投与して）得られた多数の実験のメタアナリシスである。最近是有名なコックラン・レビューなどのメタアナリシスが最もエビデンスレベルが高いらしいので、この33%にまったく症状がない！ってのは相当エビデンスレベルが高いのだろう。しかもこの文献をみると、インフルエンザの投与量、インフルエンザAとBまたは株の違いで、結果に違いはないとなっており、健康成人がインフルエンザに感染した場合は3人に1人は、まったく症状がない！ってことはかなり確からしい。

Wikipediaに戻ると、インフルエンザに嘔吐や下痢は伴うものは、子供ではあるが、大人では少ないとある。しかも、嘔吐や下痢を伴うものは、実はインフルエンザではなく、無関係の胃腸炎であることが多いと教科書に記載されているとある。ウイルス性疾患では、ウイルスを検出しても、そのウイルスが原因ではなく、別のウイルスによる疾患であることがしばしばある、ってのは感染症学の常識であり、これはウイルスが感染していると、別のウイルスが感染しにくくなったり、症状が出にくくなったりする、干渉作用のためで、これがあるから生ワクチン接種後は4週間あけて次の予防接種をすることになっている。この干渉作用に関わる物質の一つとして同定されたのがインターフェロン（その名前は干渉作用Interferenceから名づけられている）である。インターフェロンはインフルエンザAを干渉作用によって阻害する物質として、最初に同定

されたように、インフルエンザは元々干渉作用を受けやすいウイルスであることが、古くから知られていた。インフルエンザAに感染して、インフルエンザの症状を示すものは、実は4人に1人くらいしかいない。その4人に1人だけが、インフルエンザウイルスによるもので、他の症状は別のウイルスによるものだ、という極端な意見もあるようだが、インフルエンザの症状がそろっているが、全体的に軽いやつもあるので、インフルエンザウイルスによる風邪もあるだろう。アメリカのCDCも単なる風邪の5～10%はインフルエンザウイルスが原因だろうとしている。

インフルエンザの症状が出ていなくても、インフルエンザに感染しているのだから、抗インフルエンザ薬を投与した方が良いだろう、という意見もあるだろうが、現在使用されているノイラミニダーゼ阻害薬の場合は、感染拡大には逆効果になる可能性が高い。ノイラミニダーゼ阻害薬の作用は、増殖したインフルエンザウイルスが感染細胞内から出るのを阻害することによる。そのために、ウイルスは感染細胞内でさらに増殖し、遅れて漏れ出てくる。そのために、ノイラミニダーゼ阻害薬の投与によって、総排出ウイルス量は減ることは無く、かえって増加する可能性が高い。またウイルスの排出期間は、ノイラミニダーゼ阻害薬の投与によって、延長する可能性が高い。実際新しく出るゾフルーザとの比較データで、いずれのノイラミニダーゼ阻害薬も平均72時間の排出期間、95%信頼区間で96時間の排出期間である。95%ということは投与後96時間、まる4日間で、まだ40人に1人は感染力があることになり、実質投与後120時間（5日間）以上たたないと感染の危険がある。前に挙げた感染実験のメタアナリシスでは、インフルエンザウイルスの排出期間は最大で5日間であり、ウイルスの排出は症状の出る1日前くらいからなので、症状が出てから4日以内でウイルス排出がなくなっている。薬の投与は症状発現後なので、ノイラミニダーゼ阻害薬の投与で、1日くらいウイルス排出期間が延長する可能性がある。

ノイラミニダーゼ阻害薬の投与により最大18%に耐性ウイルスが出現し、予防投与の効果が減弱することとあわせて、ノイラミニダーゼ阻害薬の安易な投与は感染拡大を導く可能性が高く、実際、医療・介護施設の感染拡大阻止に有効でないことは、アナログ狸より良くご存じの方が多くいらっしゃる。

以上は普通にインターネットに載っている情報から書いたもので、英語を読む苦勞さえ厭わなければ、簡単に調べられるので、一読をお勧めする。